

## メーブルレター(12)

### 娘の婚約と父の親心

凍てつく日々です。マイナス25度を超えると大河から湯気のように白い霧がたち、橋はその中に吸い込まれてしまいます。ミステリアス。橋の向こうには何があるのでしょうか。突然、白い雪に覆われた街並みがぼっかりと現れてきます。幽玄な冬の風景です。

雪の合間の晴れた日は、霧にかすむミステリアスな風景とは一転します。モンロワイヤルの丘の樹氷が、陽を受けてクリスタルのようにきらきらと輝くことがあります。青空のもとで、凍った木の枝から出る、大きなダイヤモンドのような、光の中を通り抜けて丘を越えていきます。

こんな暮らしの中、カリブ海のマルチニクにボーイフレンドとバカンスに行っていた娘が戻ってきました。左の薬指にはダイヤモンドの指輪が光っていました。

「私、婚約したの！」

発つ前にボーイフレンドから、結婚を申し込もうと思っているのですが、お許しいただけますか、とドリトル先生にメールが入っていました。

「なんでメールでこんな大切なことをメールで言ってくるんだ。ちゃんとした場所で話すべきだろう。」

ごもつともです、ドリトル先生。

「チャンスを逃してしまって、こんな風にお話しすることになり申し訳ありません、て書いてあるけど。今、茜(娘の名前)には一番幸せな時でしょうから、黙っていてあげれば。」

娘の相手は、オタワからやってきたIT関係の仕事をしている英語系の青年です。

「美形だし。」

「そういう問題ではない。確かに美形だが。」

相手の親は仏語を話さず、少しコミュニケーションが面倒ではありますが、いずれ顔合わせということになることでしょう。

「僕の茜ちゃんがいなくなってしまう。」

ドリトル先生は元気がありません。

父親の心は娘が幾つになっても複雑なようです。思春期の頃は、夜出かけてなかなか帰らない娘を心配するのと、良き理解者の父を演じるのとのギャップに悩み、眠らず、ずーっと待ち続け、ドアに鍵を差し込むかちゃっと音がすると、寝室に駆け込み、寝ているふりをし、翌日何くわぬ顔で、

「楽しかった？いつ帰ったの？」まあ一白々しいと思ったものでした。

欧米の、子供の生き方を尊重する父親というのかなりトリックがあるようです。モンリオール植物園のディレクターは、ひところ会うたびに

「聞いてください。娘ですがね、勉強したがない上に、ボーイフレンドができたら、もう学校どころではないんですよ。将来を考えると心配なんですよ。それにあの男はなんだ。なんてるくでもないやつなんだ。夢はないし、勉強はしないし。。」ボーイフレンドをクソミソにけなします。こんな愚痴をレセプションの間中間かされたものでした。

「ちょっと他の方にご挨拶を。。」なんとかぬげださなくて。。

「そんなのほおっておけばいいですよ。それでね、今度上海郊外の植物園で仕事をするので連れて行って、向こうで勉強させようと思ったんですよ。行かないって言うんですよ。」イケメンのダイレクターの端正な顔は怒りと絶望でぐしゃぐしゃに変形していました。

「そうなんですか。えっ！上海にずーっといるんですか。」

「花の種類は多い、将来性のある植物園なのですが、でたらめなのです、植え方が。造園の指導です。」

「素敵な気分転換と国際交流のお仕事になりそうですね。奥様も喜ばれることでしょう。」

「とんでもない。妻は娘の見張りにここに置いていきます。」

また、ある某国の某総領事の奥様は、こういうのでした。

「我が家の主人なんて」と遠巻きに某総領事を眺めながら、

「どの家も、娘は心配みたいですね。夫は、娘の高校卒業のバル(舞踏会)の時にロングドレスの美しい自分の娘とそのエスコートのボーイフレンドを会場に送り届けていったのですが、」

「それで？」

「一旦帰り、その夜のカクテルパーティのお客様をお迎えしたのですが、娘が心配で、ドロンしちゃったんですよ。各国外交官、角界の主要ゲスト、何もかも放り出して。」

奥様は深い溜息をつくのでした。

「それで？」

「バルの会場の前に車を止めて、飲まず、食わずで娘がエスコートのボーイフレンドと出てくるのを5時間も6時間も待ち続けたのです。」

「それで？」

「娘が出てくると、「楽しかった？パパやっと手が空いたから迎えに来たよ。間に合って良かった。」としらーっと娘に言ったようですよ。私、1人のお客様のお相手大変だったんですから。仕事なんてどうでもいいのよ、あの人。娘命みたいよ。」彼は、その後まもなく、転任になりました。

我が家の娘の相手は、映画に出てくるように跪き、指輪を掲げて、

「結婚してくれますか。」

と言ったようです。

「ロマンチックだったわ。」夢見るように娘は語るのでした。

幸せいっぱい娘に、やはりシャンペーンで乾杯でしょうか。